

芥川だより

発行日 * 2026年3月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

これぞ 快感!



半年近く休職していた警備会社に思い切って電話する。「長く休んでいた下村ですが、月・水・金の三日ぐらい働きたいんですが可能ですか?」「折り返し電話します」次の日に、聞きなれた責任者から「久しぶりですね下村さん、週3日ですね。期間が空いているので今日にでも会社に来てもらえんですか」「了解です」。約束した昼過ぎに会社に行き簡単な手続きを行う。

木曜日の夕方、会社から明日の現場の契約先・住所を知らせてきた。翌朝早く起きてオリンピックを見ながら朝ご飯を作り、ペットの鳥の世話をし出かけた。現場は芦屋市の岩園町である。集合場所の岩ヶ原公園に行くと幾度も仕事を共にした青木さんがいた青木さんは社内でも稀な穏やかなベテラン警備員だ。真新しい服をきた二人を加えた4人が今日のメンバーである。

契約先の工事車両が5台来た。青木さんが監督と仕事内容を聞き、すぐに配置につく。今日の工事は、下水道の調査だと聞く。車を道路の片側に並べて止めるので、片側通行の誘導をするのが我々の仕事である。工事は古くなった下水道を厚生する工事の調査である。2か所のマンホールの蓋を開けてテレビカメラと高圧洗浄の管を入れる。それを車内のテレビを見ながら下水道を見ていく。継ぎ目がもろくなっていたり草や木が生えているのは高圧洗浄で吹き飛ばしたり、突き出た所は研磨機で削る。

下水道工事は多い。マンホールの蓋の取り換え、雨水路の修繕など、道路の片側通行が必要な時は警備員が必要になってくる。下水道の問題は重要で深刻な社会問題である。60年経ったマンホールの蓋の取り換えだけでも大変だ。地下にあるから下水道を目にすることはないが、下水道はインフラ整備の基本である。私も、警備員をするまでは、全く下水道を知らなかった。下水道は非常に上手く考えて作られている。そして道路の地下にあるから、工事が地上の交通規制を伴う問題があった。そこで新たな工法が考え出された。アルファライナー工法だ。

5時に仕事が終わりに、帰宅して夕食を作り、鳥の世話をし風呂に入り倒れるようにベッドで寝た。爆睡!

死をめぐるあれやこれ(134)

米国のイラン攻撃

石川 吾郎

ようやく弥生三月になって春の到来を感じようとしていた日曜日、朝からとんでもないテレビニュースが流れた。米トランプ政権とイスラエル政府の軍が、イランの首都テヘランを空爆して、ハメネイ師をはじめとするイランの政治首脳たちを殺害したと、血なまぐさいニュースだ。イラン側も報復攻撃を開始した。◆いよいよ中東戦争が始まるかと、いっぺんに暗い気持ちになってしまった。下手をすれば世界大戦にも拡がりかねない。またホルムズ海峡の閉鎖で、わが日本の石油・LPGガスエネルギーの供給が途絶えて、石油価格が高騰、物価も釣りあがることになる。案の定、その後の経過は泥沼状態化している。◆これは明らかに他国の主権を犯す国際条約違反の攻撃に思えるが、西側の国でトランプを非難する国はどこもないのかと思っていると、スペインのサンチエス首相が米国の攻撃を「違法」であると非難した。すると即座にトランプは「すべての貿易を止めるつもりだ」と脅迫する。西側諸国はこれが怖くて批判がましいことを言えないのだ。日本の高市氏もトランプを諫めるようなことは言わないことは容易に予想できる。◆世界が米中口など巨大国の暴君に支配されている、という構図はこの数年はつきりしてきた。これは明らかに民主主義が崩れ去ってしまった状態に見える。ジョー

ジ・オーウェルの「一九八四年」のデ
イストピア世界が、これまで以上に現
実味を帯びて感じられてくる・・・。

芥川だより三三〇号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム134	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 144	坂本一光	2
哲学爺いの時事故談 93	祖蔵哲	3
ボケ老人の雑話 24	明石幸次郎	4
オクラの山たより 114	因了生	5
隠された歴史 89	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	SK生	11
ふみの道草 93	山椒魚	12



素老人☆よもだ帳 (144)

◆分断と孤立の時代にまちをつくるーお
おいた・津留9条の会の講演会に参加し
て

講演会は、去る二月八日の日曜日。と
きまさに、衆議院総選挙の投票日であつ
た。重なつたのは高市総理のせい。「高市
総理でようございませぬ。国論を二分す
る政策をやらせてもらいます」と国民に
白紙委任を求め、突然の解散を仕掛けて
きたからである。結果は高市氏の「圧勝」。
それはなぜか、いま社会に何が起きてい
るか、希望の道はあるかについて考えさ
せられる講演会であつた。(ただし、高市
人気や選挙制度に依存した「圧勝」で、
「圧勝」というにはさほど票伸びず」では
あつた)

講師は、北九州でおよそ四〇年の長き
にわたり「抱撲」(ほうぼく)の会を主宰
する奥田知志牧師。「ひとりにさせない。
個人や家族に任せすぎた役割を、みん
なで分担していける社会をつくる」こと
をめざして、「希望のまちプロジェクト」
に取り組んでいる。その本拠地を、特別
危険指定暴力団工藤會の跡地に置く。

この国では一九九〇年のバブル崩壊後
に非正規労働・派遣労働者が増加、今や
二、一〇〇万人を越えている。とりわけ
あおりを食った就職氷河期世代は三〇代

後半から五〇代前半となり一、七〇〇万
人以上。ファーストと言われ、君たちこ
そが「ファーストと言われコロツと参る
闇」の中に居る。「分けたら減る」とばか
りに年収の壁を上げ、社会保険料を下げ
て若い世代の「手取りを増やそう」と言
えば受けはいいかもしれないが、「賃金を
増やす」ことが第一に必要なではないか。
社会保障や介護、医療を守るには「分け
たら増える」道を探し、「弱者共存」で、
ひとりにさせない、ひとりにならない社
会をめざさなければならぬのではない
か。

具体的に客観的なデータや「希望のま
ちづくり」の考え方を示しながら、およ
そ二時間にわたり考えさせられる講演会
であつた。

なお、開会に先立って、素老人はこん
なあいさつをした。

本日は、奥田知志先生の講演会にお越
しいただきありがとうございます。「お
いた・津留9条の会」の世話人をしてい
る者です。開会にあたりましてひと言、
ごあいさつを申し上げます。

津留9条の会は、三〇〇名を越える地
域の皆さんの賛同を得て二〇〇九年に発
足し、9条に関わる講演会の開催や、安
倍一強と言われた頃には、いわゆる「戦
争法」反対のスタンディングなどに取り
組んできました。実は二〇一九年に、創
立一〇周年を記念して奥田先生の講演会

を企画したことがあります。台風直撃予
想の中で急遽中止になりましたが、その
時のテーマは、「いのちが分断される時代
に、貧困と戦争について考える」でした。

本日のテーマは「分断と孤立の時代にま
ちをつくるー希望のまちプロジェクト」
差別・分断ではなく多様性、共生社会の
実現をめざすー命がないがしろにされる
格差が広がる中、共に生きることにつ
いて考える」です。このようにテーマを並
べてみると、この数年、私たちを取り巻
く社会状況は変わっていない、むしろ深
刻さを増していると思います。

その象徴のように、本日は衆議院議員
総選挙の投票日と重なりました。もちろ
ん投票日の方が、突然、向こうから重な
つて来たのです。高市首相は、教会でこ
ういう言葉づかいはどうかとも思いま
すが、言ってみれば、「私が総理で、よ
ござんすね」と白紙委任を求め、「国論
を二分するような政策をやらせてもら
います」と大見得を切っています。今、
私たちが望んでいるのは戦争の準備で
はない。戦争と言うなら、戦争にならな
いようにするのが政治の責任です。国民
が飢えないようにする、安心して暮らせ
るようにするのも政治の責任です。

奥田先生は、「ひとりにさせない」とい
う支援、これを大きな目標に掲げて、N
PO法人「抱撲」(ほうぼく)を主宰され
ています。「個人や家族に任せすぎた役
割を、みんなで分担していける社会をつ

くる」という取り組みです。国民が求められている、そして政治が役割を果たさなければならぬのは、こういうことではないでしょうか。

私たちの力は大きくありませんが、その力を合わせて、私たちはこれからどういう道を歩いていくか。講演をお聞きしながら、その思いを皆さんと共有したいと思えます。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(93)

祖蔵 哲

「推し」の哲学

今年に入ってから、毎月の時事ニュースのトップはトランプ関連ばかりである。1月は南米ベネズエラで米軍が作戦を展開し、マドウロ大統領を不法に拘束して裁判にかけた。2月にはミラノ・コルティナ五輪の期間中、疑惑の「エプスタイン文書」問題に関連して世界中のセレブが非難されているが、トランプ自身は権

力を使つてうまく言い逃れをしている。

さて、2月末日の28日、驚くべきニュースが飛び込んできた。もつとも、トランプに関しては、もはや「驚くべき」という表現すら使にくいのだが。米国とイスラエルがイランに軍事攻撃を開始し、最高指導者ハメネイ師を殺害した。これも明白な国際法違反である。そもそもアメリカはイランなどを勝手に「テロ国家」と指定しているが、どちらの国がテロを行っているのか、これもまた明白である。

さて、このような危機的な国際情勢のなかで日本はどうするのか。今月19日に高市首相は訪米予定であるが、またしてもトランプの横で喜び飛び跳ねるのだろうか。世界は注目というより、むしろコメディを見るような感覚で受け取るであろう。政治のショー化である。

さて、トランプにせよ高市にせよ、世界の政治はますますポピュリズム化している。ポピュリズムとは、先月号でも述べたとおり、本来の意味では、一部のエリート層が独占していた文化や知識を広く大衆に知らしめることでもある。先月は主に学術知識について「啓蒙」というテーマで話したが、これは「芸能」の分野にも当てはまる。日本では古来の伝統的演劇である「能」が、歌舞伎として大衆化されてきた。また、その役者も、仮面をかぶった人稱のない単なる「ペルソナ」から、人気役者へと変化していった。

その役者を支えているのが「贗頂」である。そして、それは浮世絵などの普及によって、ますます大衆化されていった。この贗頂という文化が、現代で言われる「推し」によく似ている。

最近のマスコミでは、この「贗頂」が「推し」として、政治の世界でも使われるようになってきている。先の衆議院選挙で見られた高市現象は、この「推し活」の効果が見れたものだとも報道されている。現代における「推し政治」の元祖は、やはりトランプのMAGA運動であろう。

このように世界の大衆を席卷する「推し」。今号ではこれを哲学してみた。

(1) 推しとは

「推し」とは、ある対象(人物・思想・作品など)に対して、単なる好意を超えて、その存在を支持し、その存続・成功・発展を願い、自ら関与し続けようとする態度である。重要なのは、好きでも尊敬でも崇拜でもなく、「支持する主体的実践」が含まれている点である。

無論、先立つのは対象に対する好意感情である。しかしそれ以上に強いのは、自己の行為に価値を見出そうとする欲求である。これは哲学的に言えば、ヘーゲルの言う「承認欲求」に近い。こんなに頑張っている自分を認めてほしいという衝動であろう。さらに先月にも触れたように、カント的に考えるならば、推しは

単なる「私的趣味」ではない。推し文化はSNSで共有され、議論され、価値判断が交換される。つまり推しは「私的感情」でありながら、きわめて「公共的」な実践なのである。

すなわち「推し」とは、他者を通して自己の存在を編み直す実践である。それは欲望であり、承認であり、志向性であり、公共性でもある。

(2) 推し政治はなぜ台頭したのか

最大の原因は、戦後冷戦体制の終了による合理的イデオロギー政治の衰退であろう。

社会学者マックス・ウェーバーは、支配には三つの類型があると説明した。すなわち、伝統的支配、合法的支配、そしてカリスマ的支配である。感情的支配を主とする伝統的支配を脱した近代民主主義は、法と制度による「合法的支配」を基盤としていた。

しかし、その法と大衆をつなぐ「官僚機構」が専門化するにつれて、知識人や官僚制度への不信が高まり、政党政治は停滞し、政策は複雑化していった。その結果、制度は硬直化し、合理的・理性的要求が進みすぎたため、逆に感情的支持を生みにくくなった。

その結果、人々は再びカリスマに政治を託すようになったと考えられる。推し政治とは、いわばカリスマ政治の民主主義

義版とも言える。民主主義ではないロシアや中国、さらにはイスラム圏の権威主義国家では、この体制はさらに強化されている。

このカリスマ政治への回帰には、SNSによる「感情政治」の拡大の影響が大きい。さらに現代社会では、新自由主義経済による自己責任化や地域共同体の弱体化によって、個人のアイデンティティが不安定になっている。その結果、人々はますます強い存在を求める傾向にある。

こうして政治は、「政策を選ぶ場」から「誰を推すかを選ぶ場」へと変化していったのである。

(3)「推し」民主主義はどこへ行くのか

カリスマ独裁は、悪い意味でのポピュリズムを暴走させやすい。それは大衆が「判断停止」に陥りやすいからである。ナチズムの例を挙げるまでもなく、「普通の人」が悪に加担することがある。とはいえ、このカリスマ独裁も、官僚制やテックノクラートを介して国民からは一定の距離を保つ政治形態であり、代表制民主主義の一形態とも言える。それに対して「推し」は本来、直接参加型であり、舞台と観客という区切られた空間から飛び出す性格を持っている。

ここに「ファンダム」という言葉がある。これは「ファン」と、領域を意味する接尾語「ダム」を組み合わせた言葉で、

アイドルなどを熱心に応援するファンの集団、あるいはその文化圏を指す。一般的な「ファンクラブ」が企業や運営側によつて主導される組織であるのに対し、ファンダムはファン同士の結びつきや自発的コミュニケーションを重視する傾向にある。このように「推し民主主義」は、本来の民主主義、すなわち直接民主主義に近づく可能性を持っている。政治参加の拡大や新しい公共圏の創出は、アーレントの言う「活動生活(ヴィータ・アクティヴァ)」、すなわち人間と人間の絆を深める場としてプラスに働く。むしろ、今の古びた民主主義に固執していることこそ問題なのかもしれない。民主主義とは本来、「理性(イデオロギー)」と「感情」との統合なのである。

「劇場型民主主義」では、観客席にいる大衆が舞台の上の役者を応援する。しかし「参加型民主主義」では、自ら舞台上に上がる。そして、演技する役者と観客という垣根を取り払い、劇場にいる参加者一人ひとりが、それぞれ異なる経験・知識・意見を持っていることを尊重する。それらを引き出し、対話を生み出し、相互の学び合いを促進する役割が、これからの役者(政治家)には求められている。「ファシリテーター(促進者)」が必要なのである。

『民主主義は最悪の政治形態と言うことができない。これまで試みられてきた民主主義以外のあらゆる政治形態を除けば。』この言葉は、チャーチル英国首相が1947年に英国下院で述べた名言である。もちろん彼は「民主主義は最悪だ」と言っているのではない。「ベストではないがベター」という意味である。つまり、民主主義という政治形態は決して理想的ではないが、これまで存在してきた政治形態の中では最もまだ、という意味である。しかし本当にそうなのだろうか。

チャーチル以後、歴史上もつとも多くの人間を殺してきた政治主体は、実は「民主主義国家であるとも言える。それは、もちろんベストでもベターでもワーストもなく、「ワースト」なのかもしれない。少なくとも、現在のままでは。

ボケ老人の雑記(その24)

明石 幸次郎

「自民党選挙公約の最優先課題の物価高対策に取り組む!は!どうなってますもんねん?」

大阪のおばちゃん的には「さなえはん、あんさん! 選挙の時は庶民の生活を守り、物価高対策を最優先で取り組んでま

いりまーすと、エライ勢いで言わはったが、それ、どないなつとりまんねん? わてら、娘と一緒に維新に入れずに自民に投票したのに、食料品の消費税、早よ下げてえなあーおばちゃんも娘も怒るで! それとお米の値段どないかして! 3年前の2倍やで、食べる量を半分減らせちゆうことかいな?」となります。

スーパーで買い物する度に、食料品がドンドン高くなっているのをボケ老人も感じます。おばちゃんだけではなく、この年金生活のおっちゃん達も政府は何してるんやと言いたくなります。

先日のニュースで、日本のエンゲル係数が44年ぶりに28.6%に上昇したと報道されていましたが、食料品の値上げが家計を圧迫しているのを証明しています。

日本の比率は他の先進国ではもつとも高い比率です。因みにオランダが10.2%で一番低く、アメリカ16.0%、ドイツ18.4%、イギリス22.3%でイタリアが25.7%で日本に近い数字ですが、日本の方が3%近く高くなっています。

日本の現状は所得の3割位は食料品購入に充てて、その他家賃、光熱費も高くなっているのです。その結果は、遊興費(高くなっていますが)などに充てる余裕が無くなつてきて、生活にゆとりがなくなりつつあります。先々月の本稿にも書きましたが、60歳代の女性が物価高騰で

食べることが精一杯となり、今までやれていたお稽古事が出来なくなり、自分だけが取り残されたようで悲しくなると嘆くような状況は、他にも大勢おられると思います。野党の党首のおっさん達よりは、高市早苗さんなら、女性としての生活感と石破さんにならぬ明るさで何か変えてくれるのではないかと思つて今回は自民党に入れたのに、と私の近所のおばちゃん達は言われています。

そんな中で高市さんは、先の選挙で当選した自民党衆議院議員全員（自分を除く）315人に、いかにも女性らしく「カタログギフト3万円」を配つたと言われています。これに対して、野党中道改革連合の小川党首の緊張感のないやんわりとした追及に対して、高市さんは「法令上何も問題がない、厳しい選挙を経て当選したことへの労いも込め、今後の活動に約立てて頂きたいと考えた。3万円という金額に対しても結婚式のご祝儀程度の感覚だ」と答えて、「自分に中小企業のおっさんのところが残っているのか全員に配つた」という。何か意味不明な庶民感覚も交え1000万円程の金額を当然のように使つたことを何が悪いんですかという顔をして答弁をしていました。

同じようなことをした、前首相の石破さんは新人議員15人に現金10万円を配つて、この時は前立憲党の党首野田さんの厳しい？ 追求に対し裏金問題のこともあつたのか「私のポケットマネーで配

りました。わるかった、多に反省しています。全員に返してもらおう」とかなんとか、まるで二人と世間の感覚から外れた答弁をしていました。

前首相、元首相共に以前からある自民党の慣例的な行いは、やり取りするお金の金額は少額になったと言え「田中角栄」的なことが今でも行われて、そのために政治資金があることを示しています。

それにしても、高市さんに比べ石破さんは正直で真面目ですね。これでは、現実のどろどろとした権力争いには高市さんには当然負けますね。まあ、凶らずしも日本のトップのせこい議員対策の一面と首相の性格？ が世界に知られて、トランプ、習近平、プーチンにも笑われていると思ひます。

日本の政界はこんなやりとりをして平和ですが、世界ではウクライナ戦争はまだまだ続きそうで、更にアメリカ、イスラエルが国際法を無視してイランを攻撃してトップを殺害する大きな出来事も起こり、これは中東問題はパレスチナ問題よりも大きな戦争になるかもしれません。

又、習近平もニンマリしてアメリカが国際法、国連を無視して自国の正義の為には、武力を使って何でもやるとならば、台湾は、元々中国固有の領土であるので、これは国内問題であるので、武力を使って取り返すのは当然の国家の行為であると侵攻するかも知れません。プーチンも元はといえばウクライナは18世紀から

ロシアの領土であつたのを今、取り戻そうとしているだけだとロシアの正義で戦争をまだまだ続けようとしています。

こんな、16世紀から20世紀にかけて欧米列強が行つた植民地主義的な力を持つて自国利益を確保しようとする「自国ファースト主義」が、再びアメリカ、ロシア、中国の三国で行われ、許されるようになれば日本はどうなるのか？ 台湾有事が起これば、日本も正義を持つて？ 台湾の為に、中国と戦争するんでしょうか？

高市さんが自民党内の権力争いと安倍元首相に取り入り地位を高めて、トップまで押し上がり、又、今回の総選挙でも「さなえ人気」を作り出して大勝した政治家としての能力を、近々行われるトランプ大統領との会談で日本の「平和なくらしを守る」ために多に發揮してもらいたいと願うのみです。余り期待は出来ませんが、威勢のいい中身の無い、女性として品のないトランプ親分に媚び入るような振る舞いだけは取らないで欲しいものです。

オクラの山たより (114)

困了生

一

一八九四(明治二十七年)十一月に「大つごもり」を「文学界」第二十四号に発表した翌年の一月。「文学界」第二十五号に樋口一葉は「たけくらべ」を發表します。しかし、一葉の作品としては長編であつた「たけくらべ」が完結したのは明治二十九年の一月のこと。この間に一葉は「軒もる月」「ゆく雲」「うつせみ」「にこりえ」「十三夜」を發表しています。そのため順序は前後しますが「たけくらべ」の完成を明治二十九年一月として考え、その検討を後回しにして、それまでに發表された作品を順次紹介・検討していくことにします。

「軒もる月」は一八九五(明治二十八年)三月末までに原稿を仕上げたとされています。「たけくらべ」が起稿されたのが一八九四年の十二月末から翌九十五年の一月と推定されており、「たけくらべ」エの全十六章のうちの第八章までが三月末までには脱稿されたと考えられていますので、「軒もる月」は「たけくらべ」の前半部分の執筆とほぼ同時進行で書かれたと考えられます。

文字の分量としては四千字足らずというこの短編は「新聞」というメディアに

発表された作品であるということは記憶してもいいことです。一八九五（明治二十八年）の四月三日と五日付の「毎日新聞」第一面に掲載されました。直接の登場人物はたった一人、しかも物語の中を流れる時間は午後九時から一時間以内という極めて小さな話であるにもかかわらず、新聞でこれを読んだ人は四十八時間ものあいだ後半の話の展開がどうなるかを待たされることとなります。この作品は前半から話の筋から大きくはずれ主人公がとんでもない変貌を遂げることで後半話が結ばれているので、一葉の意図したことかどうかはともかく、四十八時間という間において読んだ人にはかなりの衝撃を与える効果があったのは確かです。

以下、一葉の文章に触れつつ「軒もる月」のこうした問題点を追求していこうと思えます。

二

「軒もる月」は主人公の「我が良人（おっと）は今宵も帰りのおそくおはしますよ。我が子は早く睡（ねむ）りに、帰らせ給はば興なくや思さん。大路の霜に月は凍りて、踏む足いかに冷たからん。炬燵の火もいとよし、酒も温めんばかりなるを。時はいま何時か、あれ、空に聞こゆるは上野の鐘ならん。二つ三つ四つ、八時か、いな、九時なりけり」という独白から始まります。以後、展開される物

語の梗概は以下の通りです。

上野の鐘が九時を知らせるのを聞きつつ、袖は夫の帰りを案じざるを得ません。子供のために残業をしている夫の身を心配しつつ、彼女は軒端の月に眺めては溜息をつくのです。

それは彼女の脳裏にはかつて小間使いとして仕えていた華族の桜町家の「殿」の面影が焼きついて離れないためだったのです。職工の妻となった今でも自分を寵愛し幾度も手紙で求愛してやまない「殿」のことが忘れられないのです。もちろん、袖は律儀で子煩悩な夫や幼い乳呑み児を妻や母として愛しており、「殿」からの手紙を開くことすらしていません。だが、「殿」の面影を消し去らないでは「二夕心」の不貞な女子と言われても仕方がないと思ひ悩みます。ついに彼女は「殿」からの手紙を読むことで自分の心の清濁をはっきりさせようとし、す。「殿」の激しい求愛の言葉を追ううちに彼女はしだいに放心状態となつていきます。そして彼女は高笑いして「殿、我が良人、我が子、これや何者」と叫んで、淡々と「殿」からの手紙を炭火の中にすべて投じます。そんな彼女を軒端からもれてくる月の光が清々しく照らし出すのです。

前半で桜町の「殿」を忘れられない主人公が不貞な女子と言われるのではない

かと思ひ悩みますが、後半で「殿」からの十二通の手紙を読むうちに「殿、我が良人、我が子、これや何者」とて高笑いして手紙をすべて焼却してしまうという展開がこの作品の重要なポイントですが、この物語には桜町の「殿」とその妻、そして袖と職工の夫という二つの夫婦が出てきます。一葉の設定で面白いのはこの二つの夫婦がともに「入り婿」という婚姻形態とっているらしいということですが、梗概では触れられなかったのも、もう少し詳しく説明すると、袖の夫が入り婿である根拠は次の一節です。

父の一昨年失せたる時も、母の去年失せたる時も、心からの介抱に夜も帯を解き給はず、咳き入るとは背をなで、寝がへるとは抱き起こしつ、三月にあまる看病を人手にかけじと思し召しの嬉しさ

これが根拠となるのは去年までこの夫婦が妻の側の両親と同居していたことを示しており、明治半ばの常識では夫婦が妻の両親と同居するというケースは入り婿以外考えられないからです。もう一言いうなら「寝がへるとは抱き起こししていたとすれば妻である袖の生家は「裏屋（裏長屋のこと。「九尺二間」すなわち間口が九尺で奥行きが二間であり居住面積が六畳ほどの面積しかない家。ここに江戸期の庶民は三人ほどで暮らしていた）」であったとされ

ていますから、かなり窮屈な空間で袖夫婦の新婚生活はなされていたことになり

ます。また、袖の父親が一昨年、そして母親が昨年それぞれ自宅療養の末に病死しているということから両親がともに病気に苦しむ状態であったことが想像できます。とすれば一人娘しか持たない病弱の老夫婦が稼ぎのない自分たちの将来の面倒を見てくれる婿を必死になつて探した結果、実直な婿が見つかり、桜町の「殿」の屋敷から「御暇を賜は」って袖が戻つて来てまもなく結婚したという経緯を推定することは可能だと考えられます。

病弱で自分たち夫婦と同居する義理の両親がいるにもかかわらず入り婿に来てくれて、しかも結婚後は親身になつて両親を「介抱」してくれる夫を袖が「大恩人の良人」と表現するのは決して大げさではないでしょう。

袖の夫が入り婿であるとすれば、袖の姓名と住所が変化しないということがありえます。つまり、桜町の「殿」は袖が結婚して子供までいることを知らずに十二通もの袖への愛慕を語る手紙を彼女に送ってきた可能性が出てきます。

三

一方の桜町の「殿」です。作品の冒頭近くに袖が「殿」の今夜の行動の様子をいろいろと想像する次のような場面があ

ります。

桜町の殿はもはや寝処に入り給ひし頃か、さらずは燈火のもとに書物をや開き給ふ。さらずは机の上に紙を展(の)べて静かに筆をや動かし給ふ。書かせ給ふは何ならん。何事かの御打ち合はせを御朋友のもとへか、さらずば御母上に御機嫌うかがひの御状(ごじょう)か、さらずば御胸にうかぶ妄想の捨て所、詩か歌か。さらずば、我が方に賜はらんとて甲斐なき御玉章(「おんたまずき」と読み手紙のこと)にもつたいなき筆をや染め給ふ。

屋敷の中にいる「殿」の姿を思い浮かべる袖の想像は就寝する「殿」↓読書する「殿」↓手紙を書く「殿」という順序で展開されていきますが、これは袖が小間使いをしていた頃に何度も見たことのある光景の記憶からなされる想像でしょう。その中で注目すべきは「御母上に御機嫌うかがひの御状か」という部分です。ここから我々が知りうるのは、「殿」の母が存命であること、そして、「殿」と母とは手紙を介しなければならぬくらいほどの距離で隔てられているということです。いろいろとその原因は考えられますが、「殿」は男子不在の華族である桜町家に迎えられた入り婿であったと考えるのが妥当です。

このことは夫が小間使いに思いを寄せていることを知った「殿」の妻の眼差しを袖が回想する場面で「御覽ぜよ。奥方の御目には我を憎しみ殿をば嘲りの色の浮かび給ひしを」という表現からも分かります。もちろん、これは袖の意識からの表現ですが、小間使いへの夫の思いを知った妻が嫉妬、悲哀、憤怒のいずれの感情でもなく「嘲りの色」を浮かべたという表現には夫婦の冷たい関係ではなく、「奥方」が「殿」に対して優位性、「家付き娘」としての矜持を持っているらしいということも感じられます。戦前、「華族令」によつて華族の爵位の継承は皇位と同じく男子のみとされていきましたから、「殿」は男子に恵まれなかった桜町家に爵位を継承するために迎えられたいわば爵位継承要員としての「婿」だったといえるでしょう。

もう少しいえば華族の養子は宮内卿許可を必要としましたので、一般的には華族間での養子縁組となりました。おそらく「殿」はいずれかの華族の生まれながら実家の家督を継げず養子に出されたと思われまふ。「御機嫌うかがひの御状」という格別の用件もない実家の母親への手紙を書くのを習慣のようにしているという一葉の設定の背景には家から家へと譲渡されてきた人間の孤独感のあらわれではないかとも考えられます。「殿」が桜町家では入り婿として絶対的な支配権を持つ家長として地位にいる

ことはできていないということは、つまり、袖を迎える条件が「殿」にはないわけですから、袖の結婚・出産を知らずに袖あての「恋文」を送り続けていた「殿」の思いは成就する可能性はありません。高貴な家に入り婿として入った男と貧しい家に入り婿を迎えた女とを組み合わせた話を書いていくとすれば初めから二人の恋が成就するという展開を捨てて暗い部屋の中で一時間たらずの間の内面劇とするという小説の方法を一葉は採用したのでしよう。

四

さて、「軒もる月」の後半は袖が「殿」からの手紙を開封するところから始まります。前半の最後では夫に対して「二孝心の不貞の女子(おなご)」ではないかという強迫観念を抱いていてその思いが次のように書かれています。

我は二孝心持ちてすむべきや。夢さ
ら(「まったく」という意味)二孝心は
持たぬまでも我が良人を不足に思
ひてすむべきや。はかなし、はかな
し、桜町の名を忘れぬ限り我は二
心の不貞の女子なり。

この短い文の中で「二孝心」という言葉が三回までも繰り返されています。袖の強い思いが感じられます。桜町の「殿」

のことを忘れられない自分は「二孝心の不貞の女子」なのだ、と考えていた袖が、では、ずっと開封せずにいた「殿」からの手紙の封をこの夜に切ったのか。そのあたりの事情は以下のように書かれています。

今日まで封じを解かざりしは我ながら心強しと誇りたる浅はかさよ。
胸の悩みに射る矢のおそろしく、思へば卑怯の振舞なりし。身の行ひは清くもあれ心の腐りのすてがたく、ば同じ不貞の身なりけるを、いざ、さらば心試しに押し参らせん、殿も我が心を見給へ、我が良人も御覽ぜよ。

神もおはしまさば我が家の軒にとどまりて御覽ぜよ。仏もあらば我が手もとに近寄りても御覽ぜよ。我が心は清めるか濁めるか。

自分が本当に不貞の心を持っているかどうか、「殿」からの手紙を読むことによつて心がかときめくかどうかによつて判定しようとする「心試し」をしようとする袖が「殿」からの手紙を早々と処分してはいない以上、その結果が「濁」となるのは明らかです。だから、袖のこの行いは心の清濁の実験というよりも倫理観が感情を制御しうるかといった試練を自分に与えたといった方がいかにも知れませ

ん。ただし、先ほど述べたように袖と「殿」との恋が成就することはまず考えられませんが、この試練の結果はかなり厳しい結果、すなわち自己の倫理の崩壊といった結果をもたらしかねません。

もう一言つけ加えると、袖の夫への感情の内実を見ておかねばなりません。彼女の心の内での言葉で「良人」に関する言葉は「勿体なや」「大恩」「生涯大事にかけねばなるまじき人」など、いずれも「恩」に関わる言葉ばかりです。貧しい裏屋に婿入りして病身の両親の介護を献身的にして、育児費のために職工としての過酷な労働を、その労働時間を延長してまでやってくれる「良人」は恩返ししなくてはすまない存在でした。夫への愛という以前に「二夕心の不貞」ではと恐れる袖の内面には夫への「愛」をうんぬんする以前に夫から受けた「恩」を返さねばならぬ、夫の恩に報いるためには自分は不貞をしてはならぬ、という思いが強くあつたのです。

一方、「殿」のからの手紙には「恋ふ」「忘れがたし」「血の涙」「胸の炎」という言葉があり、彼が我々に近い近代代的な恋愛観があつたよう見えます。不満を感じていた現実のとげとげしい結婚生活の対極にあると見える真の恋愛を渴望することは「殿」にとって魅力的なことであつたでしょう。恩に縛られた家付きの夫を持つ女性と自由恋愛を夢みるも家に縛られた入り婿の「殿」の二人。残念

ながら、この二人の思いがどんなに強くともその恋が実ることは先ほど述べたようにありません。

五

袖が「殿」からの手紙の封を開けた時、彼女の思いは倫理による感情の抑制がでさうるかどうかの「心試し」の枠内での行為でした。しかし、手紙を読み進めるうちに袖はその枠を超えていきます。「微笑」をしつつ読む袖の心のうちは次のように表現されています。

桜町の殿の容貌(おもかけ)も今は飽くまで胸に浮かべん、我が良人が所為の幼きも強ひて隠さじ。百八煩惱のおのずから消えねばこそ、ことさらにかかは消さん。血も沸かば沸け、炎も燃えば燃えよ、とて微笑を含みて読みもていく。

これは先ほど述べた「倫理が感情を抑制できるか」という心試しの枠を超えてしまつています。「恩」という縛りをこえて袖は「良人が所為の幼き」という言葉で夫のキャラクターを批評的に表現する言葉を得て、それによって狼狽し抑圧するどころか逆に「強ひて隠さじ」とそれを解き放そうとしています。自分の夫の「所為の幼き」つまり「しぐさや振舞の幼さ、洗練のなさ」に対して「殿」の「容

貌」は単に顔つきだけではなく「おもかけ」と読ませていることから「殿」のしぐさや言葉遣いといったことまでを対比させていると思われまます。このままいけば袖は「殿」の所へと行くことになりませんが、そうはなりません。袖は倫理による感情の抑制から解放されると同時に「殿」の手紙が語る恋愛の縛りからも一挙に解放されてしまうのです。「殿」の容貌を「今は飽くまで胸に浮かべん」と決意した後で心の内のように語っています。

殿、今もしここにおはしまして、例のかたじけなき御言葉の数々、さては恨みに憎しみ添ひて御声荒く、さては勿体なき御命いまを限りとの給ふとも、我はこの眼の動かんものか、この胸の騒がんものか。

いまや甘い言葉を聞いても、恨み言を言われても、死ぬとまで迫られたとしても「眼」も動かず、「胸」も騒がないという自信を得た袖は「殿、我が良人、我が子、これや何者」と虚無的に高く笑つたあとで「殿」からの手紙をすべて破り捨て焼却します。その動作を語り手が「目に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑のおもてに手もふるえ」と語るように袖は心が決まったかのように極めて冷静に行っています。「殿、我が良人、我が子、これや何者」と

という袖の言葉には明らかに「殿」「良人」「我が子」の存在を自分にとっては何となく絶対的なものではないのだとした上で、これらに縛られつつ生きてきた自分をも相対化して個としての自分の存在をとらえる地平にまで彼女が達したことを示しています。

主人公の内面の激しい変化を経て「心強き女子」が誕生したその瞬間を高笑いの声によって鮮やかに浮かび上がった語り手は、その直後に「月や洩れくる軒端に風の音清し」という一文で物語を一気に締めくくります。そうした点から見ると「軒もる月」は一人の女性が自己を確立していく物語だといえます。ただし、それにしてはヒロイン袖の心理の変化が唐突であつて、まだまだ十分な書き込みができてはいないという印象はぬぐえませんが、

あわせて「軒もる月」の特徴は地の文章で主人公の呼称が「女」「女子」の二語だけでなされていること、そして、主人公の「袖」以外の登場人物(殿、良人、子供)の名前が示されていません。そのため一葉は袖の心の動き一点に焦点を絞って書くことによつて袖という女性の内面を深く掘り下げようとしたのではと考えられます。

以上の点から「軒もる月」は一葉にとつて実験的な作品、すなわち習作のような作品であつたのではないかと私には思えます。そういった点ではかなり早い大

正期に近代文学研究者の湯地孝がこの作品を「題材は面白いが小説というほどのものではない」と評したのは酷評に過ぎるとはいえ、その評価としておおよそはあたっていたといえます。

ただし、大急ぎで一葉のために弁解すれば、以前に見られた王朝風の、いわば物語の流れの上に主人公がいるだけの物語世界から登場人物の心理描写に力を入れる近代文学の世界を描く作家として着実に進歩し続ける一葉の一つのケルン(道標)として「軒もる月」は見落とすことのできない作品でといえます。「にぎりえ」「十三夜」という秀作はこの「軒もる月」のすぐ後から発表されました。

隠された歴史(89)

満田 正賢

私は今まで様々な角度で日本書紀・欽明紀の考察を行ってきました。そして欽明紀が虚構に満ちた創作であることを明らかにしてきました。今回はなぜこのような虚構に満ちた創作が日本書紀に織り込まれたのか、日本書紀の編纂方法に視点を当てて考察します。今回、注目する

のは欽明紀の中にある日影皇女の記述とそこについている分注です。この分注の意味を考察することで日本書紀編纂の深部を探ることが出来ると考えます。

まず、欽明紀にある欽明の妃に関する記述の一部と分注をご紹介します。

(原文)

「二年春三月、納五妃。元妃、皇后弟、曰稚綾姫皇女、是生石上皇子。次有皇后弟、曰日影皇女、(此曰皇后弟、明是檜隈高田天皇女。而列后妃之名、不見母妃姓與皇女名字。不知出何書、後勘者知之。)是生倉皇子。」

(訳文)「原本現代訳・日本書紀」山田宗睦訳による)

「二年、春三月、五「人」の妃を納れた。元の妃は、皇后の妹で稚綾姫皇女という。石上皇子を生んだ。次も皇后の妹で日影皇女といった。(ここに皇后の妹という。明らかに檜隈高田天皇「宣化」の娘である。しかるに后妃の名を列べて、母の妃の姓と、皇女の名字とを見ないし、どの書に出ているかを知らない。後に調べる人が知るであろう。)倉皇子を生んだ。」

欽明の皇后は、宣化と橘仲皇女(仁賢の娘で継体の皇后となった手白香皇女の同母妹)の間に生まれた石姫です。宣化紀には皇后橘仲皇女が三女(石姫皇女、小石姫皇女、稚綾姫皇女)と一男(上殖葉皇子)を生んだと記されています。そ

れ以外では庶妃の大河内稚子媛の記述があります。一男(火焰皇子)を生んだと記されており、日影皇女の名はどこにも見られません。分注が指摘しているのはこのことです。

なお、古事記では、宣化の娘のうち欽明に嫁いだのは石比賣命と小石比賣命の二人ですが、日本書紀では、小石比賣命がなく、その代わりに稚綾(わかあや)姫皇女と日影皇女が加えられています。

継体紀の継体崩御年に関する分注にも同様の文面があります。

(原文)

「廿五年春二月、天皇病甚。丁未、天皇崩于磐余玉穗宮、時年八十二。冬十二月丙申朔庚子、葬于藍野陵。(或本云「天皇、廿八年歲次甲寅崩。」而此云廿五年歲次辛亥崩者、取百濟本記、爲文。其文云「太歲辛亥三月、軍進至于安羅、營乞毛城。是月、高麗弑其王安。又聞、日本天皇及太子皇子、俱崩薨。」由此而言、辛亥之歲、當廿五年矣。後勘校者知之也。)」

(訳文)

「冬十二月五日、藍野の陵に葬った。(或本はいう。天皇は、二十八年、星が甲寅に宿る年に崩じた、と。しかるにここで二十五年、星が辛亥に宿る年に崩じたといったのは、百濟本記を取って文としたのである。その文はいう、太歲辛亥の三月に、軍が進んで安羅に至り、乞毛城(こつとくのさし)を営った。この月、高麗、その王安を殺した。また聞

く、日本の天皇および太子、皇子、ともに崩薨す、と。これによって言えば、辛亥の年は、まさに二十五年に当たる。後に「諸本を」つきあわせて調べるものが、正しく見わけらるる。」

継体紀の分注と欽明紀の分注の文面の同義性を重視した場合、日本書紀の校正役を担った人物がいて、その人物が分注を付け加えたという理解になります。但し、継体紀の分注に限って言えば、継体紀の編者自身が、自分が迷った内容を注釈として付け加えたという解釈も可能です。

ここで、欽明紀の意図的造作の内容についてもう一度整理しておきます。欽明紀には、日本書紀の他の巻と異なり、露骨な意図的造作の跡が見られます。「隠された歴史」では、その主な内容として次の三点を考察しています。

第一に、「隠された歴史(22)(23)」で取り上げた、筑紫天皇家隠蔽の記述です。

①欽明天皇は、実母である手白香皇女でも、前天皇(宣化)妃である橘皇女(欽明自身の皇后・石姫皇女の実母)でもなく、前々天皇(安閑)妃である山田皇女に政治を任せたいと要請したと記され、又山田皇女を皇太后に据えています。その理由は記されていません。

日本書紀の皇太后制定の基準から考えると叔母であり前々天皇（安閑）の皇后である山田皇后を皇太后に据えた欽明は明らかにおかしいと言えます。それでは逆に山田皇后が「実母で過去皇后であった人物」という皇太后制定の基準によって選ばれていたと考えればどうなるでしょうか。その結果、欽明天皇は継体天皇と手白香皇女の間に生まれた子供ではなく、安閑天皇と山田皇女の子であるということになります。この推測が事実であるとする、日本書紀は事実をなぜ意識的にねじ曲げたのか。そこに欽明紀全体の謎が集約されています。

②古事記では、宣化の娘のうち欽明に嫁いだのは石比賣命と小石比賣命の二人です。日本書紀では、小石比賣命がなく、その代わりに稚綾（わかあや）姫皇女と日影皇女が加えられています。稚綾姫皇女は古事記に倉之若江王と記された宣化の嫡男が皇女に置換えられたものです。私は、そこに後期九州王朝の真の姿である「筑紫天皇家」が隠されていると考えます。稚綾姫皇女と日影皇女は日本書紀の創作だと考えます。

③古事記では、欽明の妃である春日日爪臣女・糠子郎女が、春日山田郎女、麻呂古王、宗賀之倉王の三人の子を産んだと記されています。糠子郎女の子と記された宗賀之倉王は、日本書紀においては創作された日影皇女の生んだ皇

子「倉皇子」に置換えられています。私は、日本書紀によって抹殺された宗賀之倉王が、蘇我氏に養子に出された皇子ではないかと推測しました。この宗賀之倉王がすなわち蘇我馬子であると考えればつじつまの合うことがあります。

「隋書倭国伝に倭王は『天をもつて兄となし、日をもつて弟となす。日の出とともに政を弟に委ねる』という記述があります。ここでいう弟は必ずしも男である必要はありません。日本書紀・欽明紀に『皇后の弟を稚綾姫皇女と曰す』という記述がありますが、当時年下の兄弟・姉妹はすべて弟（オト）と呼んでいます。宗賀之倉王が蘇我馬子であれば、豊御食炊屋（とよみけかしきや）姫尊（推古天皇）は、少なくとも蘇我馬子が創作した系図の中ではそのものずばり、宗賀之倉王（蘇我馬子）の弟（妹）です。

第二に、「隠された歴史（73）（74）」で取り上げた、仏教伝来記事の造作です。

①欽明十三年十月の記事と敏達十三年秋九月及び十四年三月の記事は、（A）蘇我氏の仏像崇拜に対して、（B）物部氏、中臣氏が異議を唱えた点、（C）蘇我氏の仏教崇拜によって災いが起きたと物部氏、中臣氏が主張した点、（D）仏殿を燃やし仏像を難波の堀江に棄てた

点、など酷似しています。日本古典文学大系（岩波版）日本書紀では、敏達十三年三月記事に「以下の破仏の記事は欽明十三年十月条と同一説話の反復か。元興寺縁起には『他田天皇欲破佛法（中略）』とあって、敏達天皇の発意としている。」という注釈をつけています。この注釈のとおり、同一の元資料を模倣したものと考えてよいのではないのでしょうか。しかし元資料に記された出来事が、欽明期の出来事か敏達期の出来事かによって、歴史の読み取り方が大きく異なってきました。

②日本霊異記（日本国現報善惡霊異記）は平安初期にまとめられた説話集であり、天皇名も漢風諡号が用いられています。日本霊異記・上・第五話の内容は、類似性のある日本書紀の欽明十三年の話と敏達十三年・十五年の話に加えて、欽明十四年の光り輝く楠（樟）を使って仏像を造った話をすべて網羅しています。従ってこの話は一見すると数々の説話をまとめて一つの説話に作り上げたかのように見えます。しかし、注目すべきは、「本記（＊いかなる書物かは不明）を案（かんが）ふるに」という説明をして、元資料があったことを匂わせている点、すべての事件が敏達期に発生したと記している点、です。欽明紀と敏達紀のどちらかがどちらを模倣したかを考える上で参考になるのではないのでしょうか。すなわち敏

達紀を舞台にした元資料「本記」が先にあつて、欽明紀も敏達紀もその記事をもとに作文された可能性が高いのではないのでしょうか。なお、元資料が敏達期を舞台にしている点は、元興寺縁起の記述とも合致しています。

③日本書紀の欽明十三年には百済の聖明王が仏像や経典、僧侶を送ったという記事がありますが、それに続く記事が敏達期の記事の借り物だとすると、百済の聖明王が仏像等を送った先は、近畿とは異なる場所である可能性が高くなります。私は、それが後期九州王朝であると考えます。即ち百済の聖明王の記事は欽明紀の大半を占める朝鮮半島記事と同じ出所であり、九州王朝の史書からの借り物であると考えます。

このように、欽明紀の仏教伝来記事は、九州王朝への仏教伝来記事と、本来敏達期の出来事として蘇我家に伝わる仏教伝来記事、が日本書紀の編者の手によって欽明紀に模倣されて記されたこと、が明らかになりました。

次回は、「隠された歴史」が取り上げた欽明期の露骨な創作の第三の点を紹介するとともに、日影皇女の記事の分注に立ち返って、そこに隠された日本書紀編纂の意図について深めていきます。

俳句

影山 武司

口笛のスキップのごと春立つ日
 喃語もて語らふ母子クロツカス
 耕人の前に後ろに犬の跳ね
 掌に温もり包み余寒かな
 我よりも若き遺影や梅真白
 動かざる唇の紅春浅し
 骨灰の白さ軽さや春の雪
 薄氷や光の雫閉ぢ込めて
 木蓮の蕾薺めき空真澄
 春動くヘリコプターの音忙し

編集後記

S K 生

▲今月の紙面で何人かの筆者がコメントをされているように米国とイスラエルがイランに対して先制攻撃を行った。どう考えても国際法違反である。しかし、我々がしかねなければイランが先制攻撃をする可能性があったと米国トランプ大統領は語っている。平和のための戦争なのだと一言わんばかりである。「アメリカは世界平和のために不本意ながら正義の戦争を戦わなければならない」。これは歴代の米

国大統領が主張し続けてきたことである。かのオバマ氏ですらも「我々がよくよく考えねばならないのは、いかに戦争を終わらせるかよりも『いかに戦うか』であり、どのような状況下でならば武力行使が必要であるだけでなく倫理的に正当化されるか』である」とかつて「長続きする正義の平和 (A Just and Lasting Peace 2009. 12. 10.)」と題したスピーチで語った。▲しかしである。世に「正義の戦争」などというものが存在するのだろうか。古い話で恐縮だが「春秋に義戦なし」とは中国の古典「孟子」にある言葉だ。戦乱で明け暮れた春秋時代350年の戦いの動機はすべて欲望や利権からであり、真に正義といえる戦争は一つもなかった、と孟子は総括しているのだ。この孟子が今の世に出現して米国とイスラエルのイラン攻撃を知ったら顔を真っ赤にして憤激するに違いない。「世に義戦なし」と。▲「春秋」が出てきたついでにもう一つ。高市総理が先月の施政方針演説で「春秋左氏伝」から「信以て義を行い、義以て命を成す」という言葉を引用したことが話題になった。信頼関係を大切にして「義」つまり正しい行いをし、その「義」を積み重ねて天から与えられた使命を果たすという意味だが、高市総理は国民の信頼を得て私は「義」を行って天命を果たすという意味で使ったらしい。なるほどである。それはそれでよい。ただし、高市総理には悪いが原典

の意味は若干違う。▲大国の斉が小さな隣国の魯に対して領土紛争の係争地を返還せよと言ってきた。斉の使者に対して魯の宰相が非公式の場で答えた言葉が「信以義行、義以命成」である。魯の宰相はこの発言に続けて「大国が他の国との信頼を大切にして正しい行為をしなれば、小国は大国に従うことはできず、疎慢すなわち国々はバラバラとなって、斉は国際秩序を保てませんよ」と強く主張した。よくぞ言ったと思わず膝を打つ言葉だ。▲近々、トランプ氏と会談する高市総理はぜひとも自ら語った「信以義行、義以命成」を彼に向けて言ってほしい。そして一言付け加えて、信を失い「義」ならざる行為を続ける大国のために世界は疎慢の危機にあるとも。

季節の花



マンサク



紅白の梅



スイセン

五七五を読む ― 十七音の響き方⑥

感性が枯れ切ったのか白い空 喜代志

眼閉ずれど、／心にかぶ何もなし。

／さびしくも、また、眼をあけるかな。

啄木の歌った心象風景（石川啄木、「悲

しき玩具」）がよみがえってくる「白い

空」。

飢餓の子をテレビはなぜか追いかける

幹夫

飢餓の背景には何があるか。その一端

がオックスフラム報告書にみえる。報告

書は、世界の最富裕層1%が二〇一五年

以降の一〇年間に少なくとも四八九五

兆円の富を得たと指摘。それは現在の世

界の貧困を二十二回以上解消できる規

模に匹敵する富だという。また、最富裕

層1%は現在、下位95%が持つ富の合

計よりも多くの富を保有し、極端な富の

集中が政治権力になっているとも指摘。

歪んだ世界は、国連の言う持続可能な開

発目標の達成には程遠い現実。

未帰還の命緑の大地生む

修一

先の大戦で戦死した兵や戦禍に没し

た人々の遺骨のうち、いまだにどれだけ

の遺骨が野に山に海に放置されたまま

か。未帰還の命を抱いた大地はこんな

にも緑におおわれていると、戦後八十年
に思いを致す。

おば百歳菌は無く笑い酒をのむ 江美子

「人のため生きて自分を今生きる」、き

つとそんな百歳のおばさんなのですね。

人生は未知数だから夢を追う 幸一郎

人生も人も、未知数だから面白くて夢

がある。ただの変数だったらかないませ

んね。

欲張るな子は健やかに育ってる 笑美

子は育つものだという確信がいい。叱

る時は一喝、後はどうしたと抱きしめれ

ばいい。

シャツターを押して米寿の顔残す

いぶき

人生の節々にはきつといい顔がある

もの。

箸を持ちペンを握れる今日の幸 静代

美味しく食べられる。五七五と詠むこ

ともできる。それを有難いと思う今日の

幸せ。

梅雨晴れ間満艦飾の洗い物 廣

青空のもと家族みんなの洗濯物が風

になびいている。こんなあたりまえの平

和の光景。ウクライナやガザの廢墟を觀

るたびに、「お日さまに布団を干してい
る平和」をつくづく思う。

今日も又感謝感謝の良いお酒 幸治

課題吟「酒」と見紛う全六句とも酒の

句。感謝忘れずに。

牛尾牛歩いつも例えた農の父 智晴

この牛のように、たゆまぬ努力と不

断の歩みを忘れるなど言った父の姿が今

も目にある。「たゆまざる歩みおそろし

かたつむり」、溝上泰子のころ。

そう遠くない冥土への旅立つ日 春美

旅立つ日は誰にもやってくる。そんな

風にはなれないだろうなあと思いがな

ら、「ありふれた水に還ってゆく命」な

どと詠んだことも。

金塊は僕の身体で十二億 喜一郎

縁は無いが、どうやら1gの金(きん)

が1万7千円ほどするらしい。70kg

なら12億円!だ。ところで人の身体を

つくる元素(水素、炭素、窒素、酸素な

ど)をその辺にある水や炭などの物質で

購入すると、純物質にする費用や特殊な

元素の薬品代を入れても1万円にもな

らない。ありふれた物質が掛け替えのな

い命を生んだ自然の不思議と、人間の営

みで決まる金の価格とのこの落差は何

だろう、と思う。

古古古米今年の顔に名乗り上げ カンナ

古古古米をめぐる久しぶりの劇場化

現象。今年の流行語は決まり? それに

しても、「真つ平」ご免瑞穂の国の古古古

米」、と言いたくなります。

杉並木サイクリングの影を呑み 乃里子

薫風の中をサイクリングがゆく。杉並

木に入った途端、さっそうと走り抜ける

影が飲み込まれた。一瞬をとらえて「影

を呑み」がいい。

侵攻を許しこのまま終われるか 晋一郎

朝ドラも一石投げる平和呆け 徳治

国連憲章も国際法も無視してまかり

通る正義の数々。早く終われと願うがそ

れでお仕舞いかと思うのは被害当事

国・被害者だけではない。変わらぬ正義

とは、アンパンマンの正義を思う。